The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	独居高齢者に適した防災を目指して
Author(s)	乾, 陽亮
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 411-423
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィールドワーク報告

独居高齢者に適した防災を目指して

乾 陽亮
大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

目次

はじめに
1. フィールドワーク概要
　1.1　目的
　1.2　尼崎市武庫地区について
　1.3　錦葉会について
2. エスノグラフィー
　2.1　きっかけ
　2.2　災害よりも身近な「死」
　2.3「助け、助けられる」関係
おわりに

キーワード

防災
避難放棄者
独居高齢者
死生観

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、阪神・淡路大震災を凌ぐ戦後最悪の大規模災害となった。また、その被害の背景に高齢者や障害者への犠牲の集中があったことを無視することはできない（柳原 2014）。2012年、来る南海トラフ地震を懸念した内閣府は、最大クラスの地震・津波を仮想した南海トラフ地震新想定を発表した（中央防災対策推進検討会議南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ 2013）。前想定を大きく上回る被害想定は、社会的な関心を集めたが、周囲に頼れる人がいない独居高齢者の中には防災・避難活動を自ら放棄し始めた者も少なくない（日本災害情報学会 2012）。このように、現行の防災活動は、独居高齢者に十分に機能しているとは言い切れない。独居高齢者が防災・避難放棄者へと変容することを防ぐためには、従来の防災の他に独居高齢者の内面や課題の

理解の上に成立する防災が求められる。そこで、筆者は、独居高齢者について少しでも理解したいと思い、独居高齢者と継続的に関わることのできる兵庫県尼崎市武庫地区の老人給食会「錦葉会」でフィールドワークを行った。

1. フィールドワーク概要

1.1 目的

今回のフィールドワークは、独居高齢者に適した防災の実現に向けた事前調査という位置付けで実践し、フィールドワーク中は参与観察に徹した。フィールドとなった「錦葉会」には、2015年4月24日（金）～9月18日（金）に計12回訪問し、コミュニティの内側からしか確認できない独居高齢者の死生観や周囲との関係に対する考察を深めた。

1.2 尼崎市武庫地区について

まず、兵庫県尼崎市武庫地区について紹介しておきたい。尼崎市は兵庫県と大阪府の境界に位置し、阪神工業地帯の中枢として栄えてきた工業都市である。しかし、直近の国勢調査によれば、近年の尼崎市では、人口減少とそれに反比例して増加する独居高齢者が目立ってきている（総務省統計局 2010）。高齢単身世帯数は平成12年から平成22年までの10年間の間に16,848世帯から27,227世帯に増加しており、これは単身世帯の三世帯に一世帯の割合で高齢単身世帯が占めることを意味している。さらには、平成24年度における要介護認定者数は、23,148人であり、人口の大きく違わない西宮市の要介護認定者数16,165人と比べると、人口比における割合が大きいことが分かる（福祉医療機構 2012）。その尼崎市を六つの地区に分けた時に北西の区画にあたるのが武庫地区である。武庫（ムコ）の呼称の由来は諸説存在するが、大阪からの対岸地域を指している説が有力だろう。今から約1000年前、大阪湾の海岸線には砂浜が続き、大阪から海上の様子、向う（ムコう）の地域が鮮明に確認できた。それを当時の人々が務古の水門（ムコノミナト）と呼んだのが起こりと言われている。現在の武庫地区は、1942年に尼崎市に編入した武庫村と概ね一致し、同じ地区内でも武庫村時代の区域毎に特徴や文化が異なる（五十周年記念誌編集委員会 1998）。また、武庫地区には南北に武庫川が流れており、海抜の低い武庫地区はしばしば水害に見舞われる。行政の開示している武庫川氾濫時のハザードマップは、武庫地区ほぼ全域の浸水を危惧している（兵庫県尼崎市 2015a）。武庫川の氾濫は古来より伝承されており、今でも災害復興の功労者の名前を模した源太郎橋が残っている（兵庫県尼崎市 2015b）。このとおり、地理的に災害遭遇確率の高い武庫地区では、独居高齢者の防災が主要な課題の一つとなっている。

1.3 錦葉会について

筆者が参与観察を実施した「錦葉会」についても触れておく。錦葉会は、毎週金曜日に尼崎市立武庫地区会館で開催される65歳以上の独居高齢者を対象にした老人給食会である。地域とのつながりが希薄になりがちな独り住まいの高齢者が給食を通した「生きがい」を持つことを目的に始まった錦葉会は、昭和60年から30年以上続いている（五十周年記念誌編集委員会1998）。現在、錦葉会は、子育てを終えた8人のボランティアによって運営されている。また、1食400円で健康的な食事が食べられる錦葉会には、毎回30人弱の独居高齢者が自宅より参加する[1]。性別による参加条件は設けられていないが、ボランティアを含む関係者のほとんどが女性である[2]。

写真1. 錦葉会の給食。三ヶ月に一度の誕生日会では通常会よりも豪華な給食が提供される。（筆者撮影）

ボランティアは、朝の8時40分頃には武庫地区会館に集合して、正午を目標に給食の調理を開始する。手の込んだ給食の調理は、決して容易な作業ではないものの、ボランティアは慣れた手つきでこなしていくので調理は時間内に終了する。一食の量は成人男性の筆者が食べても満足できるほどの量であるが、参加者のほとんどが20分程度で完食する。給食を食べ終え、トイレットペーパーで食器の汚れを拭き取った人からは自由に解散できるが、食事後にボランティアや他の参加者との交流を楽しむ人がほとんどである。調理後の片付けには、ボランティア全員で協力して取り組んでも最低一時間は要する。洗い物や掃除は難なくこなす一方で大量の食器を運ぶ行為に苦戦するボランティアが目立つ[3]。片付けが終わってからは、次回以降の準備と休憩を目的としたお茶会が始まる。この時間を利用して

写真2.　片付け終了後のお茶会の様子。今後のスケジュールや改善点を共有する。畏まった形式ではなく、毎回誰かが持ってきたお菓子をつまみながら行われる。（筆者撮影）

献立担当者は、過去の記録や季節感、予算、栄養等を考慮したメニューを考える。他のボランティアは、連続欠席者や気になった点を共有しつつ、身の上話に勤しむ。参加者の「生きがい」を目的に始まった錦葉会であるが、それを支えるボランティア自身も活動を楽しんでいるように見える。さらに、独居高齢者の安否確認やボランティアの優れた連携を考慮すると、錦葉会は、「防災と言わない防災[4]」（渥美 2006）としても機能しているように思われる。

2. エスノグラフィー

2.1 きっかけ

私は、2015年3月より兵庫県尼崎市武庫地区をフィールドに活動している。本格的な研究の前に現場理解の一環として訪れたのが錦葉会である。当初、多くのコミュニティとの接触を望んでいた私は錦葉会に長居するつもりはなかった。ところが、私が調理場で目にしたボランティア活動は、私を惹きつけるのに十分な魅力を放っていた。調味料の匙加減や栄養バランス、色合い、配分に対するボランティアの姿勢はボランティアと形容するのを躊躇するほどに徹底されていた。錦葉会のボランティアに心を摑まれた私は調理後の食事会にも出席することにした。参加者が私を受け入れてくれるかに一抹の不安を抱えていたが、彼女たちは私を久しぶりに帰省する孫のように歓迎してくれた。日常生活でそこまで喜ばれることはそうそうないので、私の口角は自然と上がった。

錦葉会からの帰路、普通電車に揺られる私は言いようのない多幸感に満たされていた。そして、食事会の風変わりな光景（30人の高齢女性に混ざって20代前半の私が食事をしている様子）を思い出す度に頬を緩めた。

2.2 災害よりも身近な「死」

参与観察を始めた私が早々に感じた違和感は、独居高齢者の低下した自己効力感とそれに伴う死生観である。食事を楽しむ参加者の口からはしばしば「社会の負担になりたくない」「私は何の役にも立たない」「子供に迷惑をかけたくない」といったフレーズが出た。そして、一度誰かが発したネガティブな発言はドミノ倒しのように参加者間で連鎖していった。

初めてのフィールドワークからまだ一ヶ月に満たない頃、常連参加者の一人が急死された。その一報を聞いて、「死」に直面する機会に乏しい私は、つい一週間前に同じ空間を共有した方が既にこの世に存在していないことに当惑した。どんな顔をしたら良いのか分からなかったが、とんでもない事件が起きたことだけは理解できた。私は、動揺を悟られないように、目の前の調理器具を洗うことに専念した。そんな私とは対照的に、ボランティアは、いつも通りにキビキビと動いていた。その表情に狼狽した様子はなく、淡々と常連参加者の「死」について語った。

> 「突然やってんて。お葬式どうしようか。行きたいけど、一人行ったら、全員行かないとあかんからなあ。そのへんの線引きはしとかなあかんからなあ」
>
> ボランティアA（2015年5月15日）

単なるボランティアAの独り言に過ぎなかったが、私の耳はそれを鮮明に聞き取った。失礼ながら、その時の私は一人の人間の「死」を平易に扱うボランティアAの発言に耳を疑った。しかし、周りを見渡しても、その発言に違和感を抱いているのは私だけであった。

常連参加者の死から一週間後、ローテーションで食事のテーブルを移動していた私は、参加者Bの横で給食をいただくことになった。綺麗に整えられた白髪に鮮やかなシャツを着こなす彼女には、快活な女性という印象を受けた。中身も見

た目通りの彼女は、緊張して肩の力の抜けない私に積極的に話しかけてくれた。会話の途中で彼女が80代と知った時は、緩んだ筋肉に再びギュッと力が入った。私の父方の祖父が15年前に69歳で亡くなっているので、もし今も祖父が健在ならば彼女とほぼ同じ年齢である。そう考えると、彼女の若々しさはより際立って見えた。そんな彼女が先日他界された常連参加者の「死」について語った。

「いつも斜め前に座ってはった人知っている？　あの人羨ましいわ。たった四日間で亡くなりはってんで。痛くも、しんどくもないし、家族にも迷惑かけへん。私もそんな風に死にたいわ。今日もこれが終わったらあとは家に帰って寝るだけや」

参加者B（2015年5月22日）

私は混じり気なしに「死」を羨ましがる彼女に思わず身震いした。その発言自体にというよりも、防災を専門に研究を進めている自分とのギャップに反応してしまった。学部時代から防災活動に携わってきた私は、防災は万人にとって有益な取り組みであると信じていた。実際に、周囲の人間も私が防災を専門とすることに好意的であった。しかし、私のすぐ隣に座る参加者Bはどうだろうか。安らかな「死」を望む彼女のために防災は何ができるだろうか、余計な負担を与えないだろうか。それまで強固に信じていた規範が崩壊した人間は脆く、私はその後の会話に集中することができなかった。小学生や中学生が相手ならば「命は大切だ。だから、防災をしましょう」と自信を持って言える。しかし、「命は大切だ」という当たり前の言葉は「生」への執着が前提となっている。私が盲信してきたその言説は、「生」にそれほど執着していない、明日には亡くなっているかもしれない参加者Bの前にはほとんど意味を成さなかった。「これからの余生でほとんど100パーセントの確率で災害に遭遇することのない人が防災に従事することにどんな意味があるのか、あるとすればそれはどんな形によって実現可能なのか」という難題に直面した私は、その日から10日ばかり悩み続けた。

6月5日、幾つかの案を思いついた私は、再び参加者Bの横に着いた。前回よりも幾分緊張の和らいだ私は自分から話しかけた。そして、話が盛り上がったところで、給食の後に全員で合唱に取り組むことを提案した。というのも、歌を歌う行為ならば参加者の心身に負担を与えることなく心肺機能延いては災害時の救助要請能力の向上に寄与すると期待したからである。

「給食会の後にみんなで何かできたら良いですよね。他の老人給食会では食事の後に全員で歌を歌っているところもあるらしいですよ」

わたし

「うちら歳やから、無理やわ。歌うのもしんどいねん。それに、ずっと立っとくのもしんどいわ。寝たきりになってもうたら給食会にも来られへん。何も楽しみあれへん、生きている意味がない」

参加者B（2015年6月5日）

提案をあっさりと断れた私は、次に用意していた「神戸防災体操[5]」を提案することを止めた。

その日の錦葉会が終わる時、出口へと向かう参加者Bが目に入った。彼女は振り子のように体を左右に揺らしながらゆっくりと歩いていた。懸命に歩を進めようとするが、歩速は彼女の努力に見合っていなかった。直近の彼女の発言がより説得力を増した。いくら彼女が健康に見えるから、楽しく会話ができるからといって、すべてが若者の私と同じというわけにはいかない。私にとっては造作無い「歌うこと」「歩くこと」が彼女には負担となる。「歌うこと」や「体操」といった防災に見えない活動に防災のエッセンスを忍ばせた防災活動は「防災と言わない防災」であり、これまでに多くの防災無関心層へのアプローチを可能にしてきた。しかし、それをもってしても参加者Bのように加齢や疾患が原因で現役世代とは異なる死生観を備える人に防災を啓発するのは難しい。現に参加者Bは、私の提案した「防災と言わない防災」を受け付けなかった。その事実を無視して防災を進めても、彼女の防災意識にプラスの影響を与えることはないだろう。さらに言えば、彼女の体調が悪化し、錦葉会への参加も難しくなった時、錦葉会そのものも「防災と言わない防災」としての機能を果たせなくなるだろう。

2.3「助け、助けられる」関係

次に、私の目を引いたのは、参加者とボランティアの関係性である。外から観察できる彼女たちの関係は支援者と被支援者の関係、すなわち「助ける／助けられる」関係にしか見えない。しかし、参与観察を続けるうちに「助ける／助けられる」関係では説明し難い状況に次々と遭遇した。前述したように自分を卑下する発言

写真3.　食事会の様子。ボランティアは参加者の間に座るので、一見しただけでは、両者の区別はつかない。（筆者撮影）

の目に付く参加者であるが、ボランティアや他の参加者と接している彼女たちは楽しげであった。彼女たちを支援しているボランティアも同様である。実際に当事者として関わった私からすると、錦葉会の活動は生易しいものではない。まず、30人分の給食の調理、配膳、後片付けをたった数名のボランティアでこなす行為は体力的な負担が大きい。加えて、ボランティアは献立の作成、参加者の出欠確認、会計等の事務的作業もこなさなければならない。それにも関わらず、誰一人として嫌な顔を見せるボランティアはいない。ボランティアと参加者の関係性が気になった私は、彼女たちの相関に注意して観察を続けた。

両者を注意深く観察すると、ボランティアと参加者の間で身体接触が頻発していることに気が付いた。ボランティアの一員として活動する私も例外ではなく、毎回のように参加者から握手を求められた。握手に不慣れな私であったが、手を握る度に彼女たちが「元気もらえるわ。これで長生きできるわ」と喜んでくれるのが単純に嬉しかった。週に一度の錦葉会を除いて握手する機会のない私にとって、それまで握手は握手でしかなかったが、二回、三回と回数を重ねるにつれて、参加者と私の心的距離が縮まるのを感じた。彼女たちの手は思ったよりも温かく、握り返しは強かった。そして、奇妙なことに私は錦葉会がない日であっても、学校や自宅で何気ない拍子に彼女たちの手の感触を思い出すことがあった。それが誰の手なのかは一切分からないが、参加者の誰かと実際に握手をしている感覚であるのは間違いなかった。また、私以外にも、身体接触によるコミュニケーションは錦葉会のあらゆるところで発生していた。ある二人の参加者は常に手をつないでいた。高齢女性が手をつなぐ姿は私にとってほとんど初めての光景であったが、一心同体を体現するその姿に不自然さはなかった。そんな二人が私に声をかけてくれたことがあった。私が「気を付けて帰ってくださいね」と応じると、そっと二人は会釈をして帰って行った。腰が曲がり、実寸よりも小さくなった二人の後ろ姿は、仲睦まじい小学生に見えた。また、あるボランティアと参加者は毎食後に手を握り合いながら会話をしていた。互いに励まし、笑い合う彼女たちは言葉と表情と身体全体を使って意思疎通を図っていた。このように、複数の身体が繋がっている時、もはや「誰が助ける人で誰が助けられる人か」は判別不能であった。

そして、活動開始から約二ヶ月が経った6月12日、偶然にも私は両者の関係についてボランティアCから伺うことができた。その日、給食を食べ終えた私はいつものように皿洗いを手伝っていた。大量に積み上げられた皿に苦闘する私を見かねたボランティアCが駆け寄ってくれた。偶然できた好機に私はそれまで気になっていたことを彼女に尋ねた。それは錦葉会の歴史についてである。

> 「あそこに飾ってある感謝状の年号とか随分と前のものですけど、錦葉会の活動ってどれくらい続いているんですか」
>
> わたし

> 「30年くらいかな。でも、私たちボランティアしている感覚はないからね。純粋に来てくれる人と話しをするのが楽しい。今は昔みたいに上の世代と触れ合う機会がないからね。ここには人生の良き手本がいっぱいいらっしゃるわ。私は助けられている」
>
> ボランティアC（2015年6月12日）

私は錦葉会の来歴について尋ねたのだが、彼女は「ボランティアをしているつもりはない。私は助けられている」と語気を強めた。しかし、6月時点の私は依然として「ボランティアは助けられている」という感覚に懐疑的であった。たしかに、ボランティアCの発言や頻発する身体接触、錦葉会の活動年数を考えれば、ボランティアが参加者との関わりから何かしらを受益しているのはほぼ間違いない。だが、それを「ボランティアは助けられている」と解釈するのは少し横暴に思えた。

ようやく、私がボランティアと参加者の関係を理解できたのは、夏休暇を挟ん

で最初の錦葉会である。錦葉会では真夏の熱中症を懸念して、7月下旬から9月上旬までの2ヶ月弱は夏休みとなっている。さらに、2015年は、台風の影響で7月の錦葉会は第1週目だけであった。つまり、私は7月3日を最後に2ヶ月以上も錦葉会と関わらなかったのである。毎回自宅から往復4時間をかけて錦葉会に通うのは、面倒なことではあったが、いざ金曜日の予定が空くと「おばあちゃん元気かなあ」「9月に行っても覚えてくれるかなあ」とソワソワしてしまう自分がいた。9月18日、久しぶりの錦葉会であったが、私は諸用のために遅れて参加せねばならなかった。私が到着した頃には、ほとんどの参加者が給食を食べ終え、談笑していた。私を見つけた参加者は喋るのを一旦止めて久方ぶりの再会を喜んでくれた。後片付けのみに参加するつもりだった私は既に昼食を済ませていたが、私の前にはボランティアと参加者の計らいでデザートの抹茶プリンが置かれた。一口食べる度に彼女たちの屈託のない優しさが満腹の体に染み渡った。食器を片付ける時、私はボランティアDにこの時の感情を吐露した。

> 「なんか、久しぶりに皆さんの顔を見ることができて良かったです。何か分からないけど嬉しいです」
>
> わたし

> 「そうよねえ。私、錦葉会以外に保育所でもボランティアしているんやけど、その時に子供たちと接している時の感覚に似ているわ。全然違うんやけど、なぜか一緒にいると落ち着くというか、元気もらえるというか」
>
> ボランティアD（2015年9月18日）

私はボランティアDの言葉に共感できることが嬉しかった。この時に初めて「ボランティアは助けられている」という暗黙知を共有することができた。錦葉会の参加者は、一般に不自由を抱える保護すべき対象としか扱われていないかもしれない。しかし、彼女たちは意図せずとも周囲の人間を助けている。少なくとも、錦葉会のボランティアと参加者は「助け、助けられる」関係を形成していた。

おわりに

独居高齢者に適した防災の実現には当事者に焦点を合わせようとする姿勢が欠かせない。ゆえに、今回のフィールドワークは独居高齢者の死生観や周囲との人間関係を詳細に理解することを目的とした。本調査の結果、以下の二点が明らかになった。第一に「死」が身近な独居高齢者にとっては「防災と言わない防災」でさえも不十分。目の前の課題に苦闘する人にとって、「防災と言わない防災」の実践が負担となる場合がある。第二に独居高齢者と支援者の「助け、助けられる」関係。錦葉会における参加者は、ボランティアに「助けられる」だけでなく、他者を「助ける」こともあった。反対に参加者を支援しているボランティアはしばしば参加者から助けられていた。つまり、錦葉会での「助ける/助けられる」の境界は融和的で明確に区別することはできない。

これら二つの結果より、防災の分野がこれまで保護の対象としてしか扱ってこなかった独居高齢者の「助ける」の側面に注目することが、結果的には独居高齢者の防災の要となり得る。現役世代とは異なる死生観を抱く独居高齢者にとって、一方的な防災啓発は自己効力感の低下、最終的には防災・避難放棄の原因になってしまう。筆者がフィールドワークで出会った独居高齢者は、一見すると「助けられる」側の人にしか見えない。しかし、関わりの深い人たちは彼女たちに助けられていた。これまでのように独居高齢者の「助けられる」に注視した防災ばかりを提案するのではなく、「助ける」というアイデンティティに焦点を当てて防災を考えてみてはどうだろうか。もちろん、これは一つの事例から得られた結果に過ぎない。さらには、結果の部分で言及したように、錦葉会に参加できない、参加できなくなった方への調査が実施できていない点よりこの研究は仮説の域を脱していない。真に独居高齢者に適した防災を実現するには、更なる事例・実践研究が必須である。今後も錦葉会、その他の独居高齢者に関わる実践共同体でのフィールドワークを続けたい。独居高齢者に適した防災の実現に一つの可能性を示したところでフィールドワーク報告を締めたい。

謝辞

本報告を執筆するにあたって、指導教員の渥美公秀教授（大阪大学大学院人間科学研究科）を筆頭に研究室の先輩方、武庫地域振興センター檜垣龍樹所長からは丁寧なご教示をいただいた。そして、余所者であった私を実の子や孫のように接してくれた錦葉会のボランティア、参加者の方々など本フィールドワークの際にお世話になった皆様方に、この場を借りて心より深謝申し上げたい。

註

1　武庫地区会館を拠点にする団体には錦葉会の他に自宅からの外出が難しい独居高齢者を対象にした宅配型の給食活動を行う団体も存在する。

2　9月18日（金）の給食会には、数年ぶりに男性の方が参加された。ボランティアや参加者によると、女性と比べて現役時代に地域と関わる機会の少ない男性は錦葉会のような社会活動への参加を躊躇う傾向にある。

3　片付けの際の食器の持ち運びや高いところにある物の出し入れは主に筆者が担当した。

4　敢えて防災を声高に強調しない防災活動。防災活動とは異なる活動に防災のエッセンスを見出すことで、通常の防災活動では関心を示すことのなかった防災無関心層への啓発が可能になった。

5　アーティストの木須久貴によって開発された防災の知識や教訓を動きで表現した体操。「防災と言わない防災」として子供からの人気が高い。

参考文献

渥美公秀
2006「防災教育をデザインする」『自然災害科学』24(4): 350-356。

五十周年記念誌編集委員会
1998『尼崎市武庫社会福祉連合協議会50年のあゆみ・歴・』尼崎市武庫社会福祉連合協議会。

中央防災対策推進検討会議南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ
2013「南海トラフ巨大地震対策について」
http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg/（2015/8/12 アクセス）

総務省統計局
2010「平成22年度国勢調査」
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001037709&cycode=0（2015/9/25 アクセス）

日本災害情報学会
2012『第14回学会大会記念シンポジウム 災害情報と防災教育 これまでとこれから抄録』（2012年10月28日開催）。

兵庫県尼崎市
2015a「洪水ハザードマップ（詳細図）」
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/bosai_syobo/hazardmap/021_kouzui_hazardmap/021_hazard_syosai.html（2015/8/27 アクセス）
2015b「武庫地区歴史ポイント」
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/siminsanka/017mukotiiki/017midokoro.html（2015/8/30 アクセス）

福祉医療機構
2012「要介護・要支援認定者数――兵庫県集計結果」
http://www.wam.go.jp/wamappl/00youkaigo.nsf/aAuthorizedDetail?openagent&NM=28&DATE=2012%252F12（2015/12/6 アクセス）

柳原崇男
2014「災害時要援護者の避難支援体制に関する一考察」『日本福祉のまちづくり学会』16(1): 10-17。